赤い車の店にご注意を

織田慶次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い車の店にご注意を

【Nコード】

N4972L

【作者名】

織田慶次

【あらすじ】

僕は車の免許を取った。それで車を買に行ったしかしその店はちよっと変だった。

(前書き)

初めてのホラーだ。楽しんで読んでくれ。

この日僕は車の免許を取った。何年も何年も頑張つて取った。さつさと車を買に行こう。

でもお金はないからできるだけ安いのがいいなと思ひながらパソコンで自分の家の近くの車を売っている店を探した。探し初めて数分いい店がヒットした中古の車を売る店らしい、中古だから安いと思ひ場所をメモしてその店に向かった。

家を出て10分は超えたであろう、そろそろ着くかなと思ひ始めたら着いた。早速どんな車があるか見ると赤い車しかない、一瞬変とは思ったがいろいろと車を見た。本当に赤い車しかなかった。だけど殆どの車が安いあり得ないほど安い。少し怖くなったがその中で中間くらいの値段の車を買った。店員を呼び

「この車を買います」

「はい、ありがとうございます。気を付けて運転してくださいね」

僕は最後の言葉が気になってしまったが気にしないで買うことにした。

僕は早速、車に乗ったどうせ明日も休みだから遠いところに行こうと思ひ自然の多いところを目指し走って行った。

自分の車で走る気持ち良さ最高だ、もう車でずっと走っていたい。いつの間にか外は暗くなっていた。もっと走りたいけど家に帰ることにした。

思わずかなり森の奥に行ってしまった。そう思ひ始めたとき、女の人が道の真ん中で手を振っている。

たぶんヒッチハイクだろうと思ひ車を止めた。

「どうしたんですか」

「・・・」女は無言だった、ほつとこうと思ひ少しバックするため後ろを見た。僕はもう少しで気絶するかと思つた。後ろの席に女の女が座っている。座らせた、そんなことはない後ろのドアを開けて

ないんだから

「そこを真つ直ぐ」小さな声で女は言う。

「は、はい」怖いしかなぜか逃げられない。

逃げたいしかし無理だ。なぜだなぜだ

そう考えた。崖に気づかつ僕は真つ逆さまに落ちて行った。

ものすごく体が痛い。もうだめだ死ぬ助け何でこない。

足音が聞こえる、やった助けが来た

その人はこつちに確実に近づいている。その人が目の前に来た。その人はなんとあの店員だった。

店員は崖から落ちたのになぜか無傷の車を見て

「また、赤くなりました」と、独り言を言っている。そして倒れている僕を無視して

「では、失礼。赤い車の店にご注意を」

そうして店員はいなくなつた。

(後書き)

車を買うときはよく注意をして買おう
赤い車にご注意を・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4972/>

赤い車の店にご注意を

2011年1月27日13時23分発行